

## 特集「音声言語情報処理」の編集にあたって

中 川 聖 一†

本特集号は、本学会音声言語情報処理研究会（SLP）が母体となって企画したものである。本研究会は平成6年4月に発足し、丸5年を経過したことになる。前身の「音声言語情報処理と音声入出力装置」研究グループの2年間の活動を合わせると7年になる。この間に、音声情報処理分野は2つの大きなトピックが見られた。1つは平成5年度～平成7年度にわたって行われた文部省重点領域研究「音声対話」による音声対話現象の分析研究とメーカーも含めた音声対話システム、マルチモーダル対話システムの構築研究の進展である。他の1つは、本格的な日本語ディクテーション研究の勃興である。

前者については、本学会誌の平成7年11月号の特集号「音声言語情報処理の現状と研究課題」で当時の状況を見ることができ、その後も音声インタフェースという方向で活発に研究が続けられている。後者については、本研究会のワーキンググループが中心となって収録された音声データベース JNAS とテキストデータベースの整備により、また、実用的なディクテーションソフトウェアの発売により我国でも一気に大語彙連続音声認識の研究が盛んになった。また、音声対話技術とディクテーション技術の向上により新しい音声応用分野の研究も芽生えてきた。

本特集号は、このような状況のもとに、音声言語処理に関する研究発表の機会を設けるとともに、現状を把握し、今後の更なる発展の種を見出すことを目的に企画された。最終的に23編の投稿があり、厳正な査読の結果15編が採録された。特集号という性格上、短期間での修正が無理だと判断され、不採録となった優れた論文もあった。

採録された15編の論文は、韻律処理が1編、大語彙連続音声認識関連が4編、音声認識用言語モデルが3編、音声対話・翻訳システム関連が4編、音声インタフェース・応用関連が3編である。これは如実に最近の研究動向を反映している。ただ残念ながら、感性情報処理と関連のある音声合成の採録論文がなく、韻律処理も伝統的内容の1つだけであったのが寂しい。

また、音声対話システムの論文はなかったが、これはシステム構築の開発研究が一段落したことによる。いずれ近いうちに、より洗練された対話システムの論文が増えてくると思われる。

音声応用に関しては、意欲的な研究が見られるようになってきた。今後この種の研究は増え続けると思われる。応用研究と対話やディクテーションの基礎研究は、互いに目を離せない状況になってきている。しかし、応用研究の1つと期待される音声言語教育や福祉関連の投稿論文が皆無だったことも残念である。今後の研究に期待することにした。

本特集号が「音声言語情報処理」の研究の発展に貢献し、周辺分野の方々には本分野に御関心を持っていただくことになれば、望外の喜びである。

なお、音声言語情報処理研究会の初代の幹事（前身の研究グループを含めて4年間の幹事）として本研究会を育ててこられた小林豊先生（京都工芸繊維大学助教授・当時）は、平成9年12月21日に急逝されました。ここに本特集号を捧げ、故小林先生のご冥福をお祈りいたします。

最後に、本特集号の機会を与えて下さった論文誌編集委員会と、本特集の実現に貢献していただいた著者各位、38名の査読委員、学会事務局の関係各位に紙面をお借りして感謝申し上げます。

- 編集長

中川聖一（豊橋技術科学大学）

- 編集委員

岡田美智男（ATR）、

河原達也（京都大学）、

北橋忠宏（大阪大学）、

小林哲則（早稲田大学）、

嵯峨山茂樹（北陸先端科学技術大学院大学）、

鹿野清宏（奈良先端科学技術大学院大学）、

新田恒雄（豊橋技術科学大学）、

畑岡信夫（日立）、

山下洋一（立命館大学）

† 豊橋技術科学大学情報工学系